

香取遺産

◀ かくれ卵塔 (中央)



vol.189 ^{らんとう} かくれ卵塔

^{ほんろう} 時代に翻弄された仏塔

かくれ卵塔と呼ぶ仏塔が、栗源地域沢地区の道の駅くりもと東側の小高い一画にあります。

卵塔とは最上部の塔身部分^{とうしん}が卵のように丸い仏塔で、この部分が継ぎ目のない一つの石から作られることから無縫塔^{むほうとう}とも呼ばれます。主に僧侶の墓塔として使われます。

かくれ卵塔は、僧である日講^{にっこう}(1626～1698年)が日向国^{ひゅうがのくに}(現在の宮崎県)で長期間に及ぶ大掛かりな読経を成し遂げた事績を留めるために日講の死後、弟子が建てたものです。日講は京都の出身ですが、僧の学校である飯高檀林^{はんこうだんりん}(匝瑳市)と中村檀林(多古町)で学んだ後に、野呂檀林(千葉市)では講師を務めた千葉県域と関わりが深い人物です。しかし、野呂檀林で講師をしている時に、属していた宗派・不受不施派^{ふじゆふせは}が幕府に禁じられ、日講は教義を変えなかったため日向国へ追放され、その地で亡くなります。弟子は、隠れながら日講の教えを受け継ぎ、宝永2(1705)年にこの卵塔を建てました。その後、卵塔は禁じられた宗派のものであったため火で焼かれ、割られて埋められてしまっています。明治時代になるまで不受不施派は禁止されました。

現在、卵塔は近辺の信徒により掘り起こされ、割れた石材が金属の囲いで束ねられています。このように時代の流れに翻弄されながらも守られてきた卵塔は、今も地域で大切に保存されています。

岡生涯学習課

☎ 1224

